様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月 ２０ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１１８０３

研究課題名（和文）中国共産党体制の「族群と政治」に関する研究

研究課題名（英文）Research on the relationship between Han Chinese subgroups and the politics of the Chinese communist party

研究代表者
藤野　彰（FUJINO, AKIRA）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・名誉教授

研究者番号：６０６４６４０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：中国共産党は1927年に建設した最初の農村革命根拠地・井岡山で地域特有のエスニック問題である土客籍矛盾（先住民の土籍人と移住民の客籍〔客家〕人の歴史的な対立問題）に直面し、その矛盾は党内へと持ち込まれた。毛沢東は階級観念の浸透によるエスニック意識の克服を目指したが、矛盾は深刻な内部抗争へと発展し、井岡山根拠地は崩壊した。
本研究は「客家と毛沢東革命」「中国共産党と族群問題」という新たな視点から井岡山闘争の実態を解明し、土客籍対立の歴史的教訓が共産党の民族・族群政策に及ぼした影響を実証的に明らかにした。以上の研究成果は複数の著書の刊行や学術発表の形で社会へ還元した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、これまで主として文化人類学や漢語方言学といった視点から研究されることの多かった客家に対して、中国共産党の革命・政治との関連性というスポットを当て、研究テーマとしての「客家」と「中国政治」の間の架橋を達成したことにある。
また、客家を手掛かりに、中国共産党がいかに民族・族群問題を政治的、理論的に止揚し、「中華民族」概念に一元化してきたかについて因果関係を究明した。これらの問題は表面的には見えにくい中国の政治社会の伏流水であり、著書の刊行や学術発表を通じて複雑な中国を多角的に理解するための有意義な知見を提示できたと考える。

研究成果の概要（英文）：In October 1927, Mao Zedong led an defeated army into the Jinggangshan mountains to set up a revolutionary base. The villages of the central Jinggangshan were territory of the Hakkas (keji, or guest people), who were led by two bandit chiefs. Then Mao successfully organized them into the Red Army. However, there were another ethnic people named tuji(native inhabitants)in this area, and the ethnic dispute between different peoples was razor-sharp. As a result, these ethnic conflict spilled over into the Communist Party, these bandits were finally killed by the Red Army.
My research has found the truth of the incident, referring to Mao’s probable involvement in the internal conflict. The incident traumatized the Party and lingered in Mao’s heart. Although Hakkas played an important role in the revolution, the official history of CPC does not dare to recognize the matter. The so-called Hakka paradox is presumed to be caused by the tragic story of Mao’s revolution in Jinggangshan.

研究分野：現代中国政治、中国共産党史

キーワード：中国共産党　中国革命　毛沢東　井岡山革命根拠地　中央革命根拠地　客家　族群　粛清

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　私は中国共産党の政治文化の特性とその起源は何かという問題意識から、漢族の中の多様な族群（エスニック集団）と革命・政治との関係性に関心を抱いてきた。とりわけ、農村革命が主として江西、福建両省など中国南部の客家（Hakka）居住地域で展開された歴史的経緯から、有力な革命家や軍人を多数輩出してきた客家に注目し、2010 年に『客家と中国革命』（矢吹晋との共著、東方書店、全 390 頁）を上梓した。以降、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）を活用し、基盤研究（C）「台湾の客家運動と海峡両岸の多元化の潮流に関する実証研究」（2013-2015 年度、課題番号：25360001）において関連の研究を進めたが、さらに焦点を絞って問題を深く探求する必要性を痛感し、基盤研究（C）「中国共産党体制の『族群と政治』に関する研究」（2018-2023 年度、課題番号：18K11803）において継続研究に取り組むことになった。

(2)　研究開始当初は、1920 年代後半の毛沢東の井岡山闘争（湖南・江西省境地帯）と地元の客家とのかかわりについて調査を行うことを計画した。井岡山闘争は共産党にとっての族群問題の原点とも言える出来事であり、これに関しては前著『客家と中国革命』でも取り上げたものの、問題を掘り下げて解明するには至らなかったからである。また、客家の主要な拠点である広東省の族群政治の歴史と実態を研究することも計画した。これは客家人、広府人など四つの主要族群がしのぎを削る同省は「族群と政治」のショーウインドーのような地域であり、事例研究に適しているとの判断によるものである。

２．研究の目的

(1) 本研究の主要な目的は、従来の客家研究、中国革命史研究、中国政治研究における空白を埋めることにある。中国では中華人民共和国建国以降、階級闘争史観が学術界を支配する中で客家研究は長期にわたって停滞を余儀なくされ、それが再開されたのは改革開放後の 1980 年代末のことだった。以降、客家研究は活発化したが、分野は主に客家の歴史、文化、言語、風俗などの非政治分野に偏り、「客家と革命」についてはほとんど論じられてこなかった。また、日本など海外においても客家研究は歴史、文化、言語あるいは文化人類学的観点からの研究が主体であり、政治との関係性は関心を持たれてこなかった。一方、現代中国政治研究の世界では、少数民族問題は扱われるものの、客家などの漢族エスニック問題は視野に入っていないのが実情である。本研究はいわば「客家」「革命」「政治」「毛沢東」の間を架橋し、革命と政治の世界で「見えざる存在」となっていた客家の実像を可視化することを主眼としている。

(2) 中国共産党は 2021 年 7 月、創設 100 年を迎えた。中国国内はもとより国際的にも中国共産党の一世紀の歩みが関心を集め、その歴史や体制、将来展望が様々な論議を呼んでいる。共産党中国の実質的な原点は毛沢東が井岡山で開始した農村革命闘争にあり、そこで今日に至る党軍システムの初歩的な原型が形作られた。いま「井岡山闘争（中国革命）とは何だったのか」を改めて問うことは「共産党体制はいかに構築されたのか」を再検討し、現代中国が抱える諸矛盾の根源を究明することにつながる。

３．研究の方法

(1) 中国共産党政治と族群（とりわけ客家）に関する史資料の収集・分析を研究の柱とした。日本国内においては主として東洋文庫、国立国会図書館関西館、各大学図書館などの所蔵資料を幅広く調査したが、北京の中国国家図書館や台北の中央研究院近代史研究所図書館、国家図書館でも資料収集を行った。関係の史資料の中で特に重視したのは、共産党内の歴史的な公式文書を編集した各種の檔案史料および共産党幹部、軍幹部らの回想録である。共産党史関連の文献・資料は、政治的理由から未公開のものが多数存在すると推定されるが、一連の作業を通じ、アクセス可能な公開資料を丹念に調査し、分散的に記述されている情報を、有機的に統合・分析することによって、歴史の中に埋没している「新事実」の輪郭を浮き彫りにできるとの確証を得た。

(2) 現地調査も可能な範囲で実施した。優先したのは、共産党政治に族群問題が反映された最初のケースである井岡山革命根拠地の現地調査（2018 年 9 月、江西省井岡山市）である。毛沢東は井岡山において初めて現実の族群問題――土籍（先住の江西人）と客籍（移住民の客家人）の間の歴史的対立――に直面したが、井岡山の革命史跡等の展示内容の調査、現地の革命史研究者との研究交流などを通じて、族群問題が初期の農村根拠地建設と毛沢東の革命路線に与えた影響を複眼的に考察できた。ただ、その後、コロナ禍の深刻化と長期化によって現地調査を継続して実施することが困難になったため、当初予定していた広東省への研究出張は断念せざるをえなくなった。コロナ禍以降は基本的に文献調査に集中することで研究を深化させた。

４．研究成果

(1) 研究の主な成果

2022 年１月、研究の第一段階の集大成として単著『客家と毛沢東革命――井岡山闘争に見る

「民族」問題の政治学』（日本評論社、全 518 頁）を刊行した。本書は 1927 年 10 月に江西・湖南省境の井岡山から始まった毛沢東の農村革命と、根拠地の主要な族群であった客家の関係性を主題としている。客家は漢民族の中の一つの支系であり、独自の漢語方言・客家語を話し、孫文、鄧小平、朱徳、葉剣英ら多くの革命家を輩出してきたことで知られている。1934 年 10 月の長征出発までの毛沢東革命は主に江西・福建の客家居住地域で展開された。つまり、毛沢東と共産党は客家の人的・物的資源に依拠し、それを最大限利用することによって革命闘争を推進できた。本書の概要は以下の通りである。

①【序章】「客家と革命」をめぐる検討課題

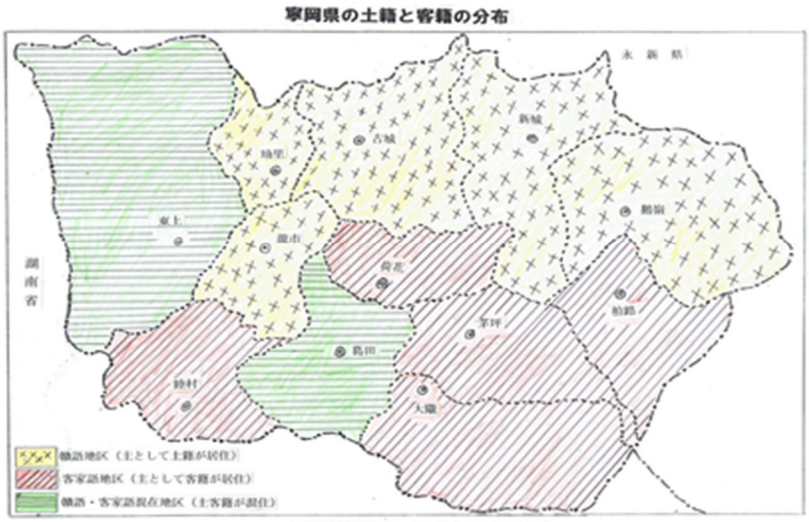
中国革命における客家の存在感の大きさを、紅軍幹部の出身地分析などを通じて統計的に実証した。例えば、工農紅軍第一方面軍の幹部の約 18%は純客家県（客家が大半を占める県）出身者であることなどを明らかにした。また、客家が「官方歴史学」（共産党の歴史観に基づく公的歴史）から排除されている現状を実地調査し、各地の主要な客家博物館、革命博物館では「客家と革命」への言及がほぼないことを確認した。このほか、建国後の体制下で客家が自己主張を抑制されてきた状況を、客家自身の具体的言説を事例に挙げて分析した。明らかにできたのは、共産党の強力な中央集権の一元化政策の陰で、客家側には自らのアイデンティティー発揚がセクト主義、地方主義との批判を受けることを警戒する空気が存在していたことである。本章では、問題の淵源は共産党が客家問題に初めて直面した井岡山闘争にまで遡るとの問題提起を行った。

②【第一章】井岡山――毛沢東と客家土匪の同盟

1927 年の秋収蜂起に失敗した毛沢東は工農革命軍を率いて井岡山に入り、客家土匪の袁文才、王佐と同盟を結び、彼らの支援を獲得することで根拠地を築くことができた。本章では、袁王と統一戦線を組んだ毛沢東の戦略、袁王に対する組織的・思想的改造の経緯と問題点、袁王の実像などを論述した。当時の毛沢東は革命闘争の即戦力として土匪・会党との連携を重視していたが、井岡山の党内では土匪との同盟を危険視する意見も根強く、袁王との統一戦線は当初から党内のコンセンサスを欠いていた。また、袁王の側も諸手を挙げて革命軍を受け入れたわけではなく、裏切りに遭うのではないかとの疑念を抱いていた。事実、共産党の土匪政策は極めて実利主義的な打算から生まれたものであり、政策転換の可能性は常に存在していた。中国の公的歴史では一般的に袁王との同盟は毛沢東の功績とされているが、実際には極めて微妙な均衡の上に成り立っていた不安定な関係であり、そこに後述する袁王事件の遠因も潜んでいた。

③【第二章】土籍と客籍の歴史的抗争

本章では、井岡山の土客籍矛盾の実態を、歴史的な客家差別を俯瞰しながら検証した。井岡山一帯は明清時代に福建、広東などから移住してきた客家（井岡山では客籍と呼称）と、先住民の土籍（客家語と異なる贛語〔江西方言〕が母語）の混住地域であった。ただ、平地は土籍が占拠していたため、客家は主に山地に居住していた。客家は政治経済的に劣勢にあり、土籍から抑圧され、両者の対立には深刻なものがあった。特に、地元の党権力を握る土籍幹部と、武力を握る客籍の袁王との反目は激しく、「土籍の党」対「客籍の銃（軍）」の抗争が常態化していた。下図は、毛沢東が省境各県の中で土客籍対立が最も深刻と嘆いた寧岡県の土客籍分布図である。両者の居住地域がかなり異なることが分かる（×は土籍、斜線は客籍、横線は土客混在）。



出所：『寧岡県志』（897 頁）を参考に著者作成。

毛沢東は土客籍矛盾に対して「労農階級に持ち込まれてはならず、ましてや党内に持ち込まれてはならない」として警戒を強め、土客籍闘争を階級闘争に昇華するよう呼びかけた。階級観念で土客籍矛盾を封印するとの考え方であり、これはエスニック問題に対する党の基本原則へとつながっていく。だが、両者の対立は激化し、抗争は党内に持ち込まれる結果になった。背景には

革命軍が袁王部隊と合体したことで、井岡山の土客籍の権力バランスが「客籍の銃」優位に傾いたことが影を落としていた。なお、本章では、歴史的に被抑圧者の立場にあった客家について、共産党が「革命的で、土地革命をやりやすい」と評価していた事実を史料により明らかにした。

④【第三章】六全大会決議と袁王問題

〔表 1〕土客籍矛盾を背景に井岡山革命根拠地で発生した主な粛清事件（諸資料を基に著者作成）

犠牲者	事件当時の役職	土客籍の区分	事件発生年月	粛清実行者
龍家衡	永新県委婦女部長	土籍（永新県）	1928 年 8 月	宛希先の配下
文根宗	元寧岡県工農兵政府主席	土籍（寧岡県）	1928 年 9 月	客籍
宛希先	茶陵県特別区委書記	湖北人（客籍と近い）	1929 年冬	土籍
袁文才	寧岡県赤衛大隊長	客籍（寧岡県）	1930 年 2 月	土籍
王　佐	紅五軍第五縦隊司令	客籍（遂川県）	1930 年 2 月	土籍

井岡山革命根拠地の党軍体制に大きな動揺をもたらすことになったのは 1928 年夏、モスクワで開催された中国共産党第六回全国代表大会（六全大会）の「土匪決議」だった。同決議は土匪首領を「反革命の頭目」と見なし、「暴動前は彼らと同盟を結んでよいが、暴動後はその武装を解除して指導者をたたきつぶさなければならない」との新方針を現場に指示する内容だった。この決定に、土籍幹部らは袁王打倒の好機が訪れたと勢いづき、1929 年 1 月の柏路会議で袁王殺害を主張した。毛沢東は袁王を擁護し、土客籍対立を緩和するため、袁文才を参謀長として紅四軍の贛南進軍に同行させた。しかし、行軍の途上、袁文才は部隊から逃亡し、井岡山へ帰還してしまった。毛沢東はこの事実を中共中央に報告している。本章では、この逃亡事件を機に毛沢東の袁王との統一戦線が曲がり角を迎え、毛沢東が「袁王擁護」から「袁王排除」へと方向転換していった可能性を指摘した。一方、井岡山では土客籍矛盾を背景に 1928 年夏から幹部間の粛清事件が相次ぎ、土客籍の報復合戦の様相を呈していた〔表 1〕。共産党が矛盾拡大を阻止できなかったことが袁王事件の発生を招く要因の一つになる。

⑤【第四章】袁王事件――土客籍矛盾の暴発

袁王殺害の方針は 1930 年 1 月に開催された雩田会議で決定された。会議を主宰したのは中共中央から派遣された巡視員の潘心源で、根拠地党機関である湘贛辺界特別委員会、贛西特別委員会および紅五軍軍事委員会の代表者が謀議に加わった。中共党史では同会議はほとんど言及されることがない。本章では同会議の性格を分析し、袁王殺害が中共中央と根拠地党軍の共同意思による機関決定であったことを明らかにした。つまり、袁王事件は偶発的なものではなく、周到に準備された、組織的かつ計画的な粛清であったということである。事件は翌月下旬、永新県城で起き、紅五軍の出動により袁王と彼らの部下 40 数名が粛清された。事件を機に袁王の影響下にあった井岡山の客籍は共産党に背を向け、根拠地は崩壊した。本章の重要ポイントは(a)雩田会議直後の二七会議で毛沢東は根拠地党軍の全権を掌握しており、彼の了承なしに袁王殺害を決行することは困難であった、(b)通説では紅五軍の軍長、彭徳懐は土籍幹部の懇請により部隊を出動させたとされているが、彼は雩田会議の当事者の一人であり、そもそも反袁王の立場だった――の２点を実証したことである。

⑥【第五章】毛沢東と袁王事件

通説では毛沢東は袁王を一貫して擁護し、袁王殺害には関与していない、とされている。しかし、公開史料にはそれを裏付ける証拠は何も見当たらない。逆に毛沢東の何らかの関与の可能性を示す傍証は史資料で確認できる。本章では(a)事件後の南陽会議で毛沢東が袁文才を「完全に富農路線の主張者」と批判した、(b)毛沢東が書記を務める前敵委員会（最高指導機関）は「袁王の党籍を剥奪した上で片付ける」ことを決定していた――などの事実を、史料に基づいて提示した。重要な問題点は、毛沢東は 1929 年後半から 1930 年初めにかけて党軍内からの階級異分子（富農や土匪）排除の動きを強め、その流れの中で袁王粛清が断行されたという客観的事実である。いわば、袁王事件は土客籍矛盾と、階級純化の急進主義が交錯する形で引き起こされた。遅くとも 1930 年初頭には毛沢東の考えは「袁王排除」へ傾斜し、この方向転換があって初めて袁王殺害決行の政治環境が整えられたというのが仮説の要点である。

⑦【終章】中国共産党政治とエスニック問題

井岡山闘争の功労者であった袁王は、粛清後長い間、「反革命」とされ、否定的評価がつきまとった。一応の名誉回復を果たし、革命烈士に追認されたのは建国後の 1950 年のことである。しかし、その後も彼らの歴史的評価は定まらず、その功績の公認は改革開放を待たなければならなかった。土客籍矛盾をめぐる共産党の失策、党軍による組織的な袁王粛清、根拠地の崩壊という政治問題が絡んでいるほか、毛沢東と袁王事件の関係という難題があり、袁王評価を扱いにくいものにしたと言える。毛沢東は客家問題（土客籍矛盾）について 1928 年 11 月の「井岡山前委の中央への報告」（「井岡山の闘争」）の中で言及しただけで、以後、基本的に沈黙を守った。毛沢東が根拠地各地で行った多くの農村調査は実質的に「客家」社会調査であったが、客家（客籍）

という言葉は「尋烏調査」(1930 年）に一ヵ所登場するのみである。彼は客家の存在も特性も十分理解していたが、階級観念により族群観念を封じ込めたというのが本章での推論である。このようにして、その後、「客家は存在するが、語られない」との、エルボーのいう「客家パラドックス」(後述）が生まれることになった。台湾でも民主化以前は族群の政治的・文化的主張は抑圧され、客家は「隠形人（透明人間)」と呼ばれた。中国では客家は非政治分野の「語られる客家」と、政治分野の「語られない客家」に二極分化し、その状況は今日でも観察される。

(2) 本書の学術的価値

エスニック問題が共産党革命に及ぼした影響を、井岡山闘争を事例に究明し、客家研究と革命史研究に新たな視点を提供したことにある。具体的には以下の３点を挙げたい。

①井岡山の土客籍矛盾を客家問題の歴史の中に位置付け、それが根拠地の党軍体制や共産党のエスニック政策に及ぼした影響を明らかにした。土客籍の対立は袁王事件という形で暴発し、井岡山革命根拠地は 2 年 5 ヵ月で崩壊した。土客籍矛盾への対処に失敗したことは手痛い政治的教訓となり、共産党は「階級による連帯」というイデオロギーによってエスニック矛盾およびその反映である地方主義、セクト主義を徹底的に否定･封印する政治文化を醸成するようになった。

②袁王事件の政策決定過程と発生原因を、土客籍矛盾のみならず、コミンテルンおよび中共中央の土匪・富農政策の変化、毛沢東の根拠地権力の掌握および党軍体制の階級純化路線（土匪・富農の徹底排除）の観点から見直し、袁王事件が革命闘争の潮流変化と連動して起きたことを明らかにした。特に、通説では毛沢東は袁王事件とは無関係とされてきたが、史資料の綿密な再検討により、毛沢東の関与の可能性を実証的に分析し、袁王事件の新たな構図を仮説として提示した。

③客家が中国共産党の革命・政治の世界で「見えざる存在」となっている現象の歴史的、政治的原因を、井岡山の土客籍矛盾にまで遡って解明した。さらに、建国直後の 1950 年代に広東で起きた反地方主義闘争で葉剣英ら客家指導者らが毛沢東の批判対象となった事件なども検証し、客家が党内で客家としての自己主張をしにくい政治風土が形成されたことを明らかにした。

(3) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

中国の「官方歴史学」では「客家と革命」「客家と政治」の問題は基本的に排除されており、公式に言及されることがない。また、中国の革命史研究において井岡山闘争は多くの研究蓄積があるが、毛沢東と袁王事件の関係はほとんど研究対象から除外されている。毛沢東の威信と評価にかかわる敏感な問題であるため、政治的制約があると推測される。また、「客家と革命」については、近年、舒龍主編『客家與中国蘇維埃革命運動』(中央文献出版社、2004 年）などの研究書も刊行されているが、基本的に客家の「革命への貢献」を紹介するレベルにとどまっており、研究の多角性と深みに欠けている。

日本の研究界では、「見えざる客家」の問題について小島晋治、中川学、福本勝清らの研究者が疑問を提起したことがあったが、その理由や歴史的背景を実証的に究明する研究には発展せず、事実上手付かずのままだった。中国革命の中の客家については、孫江『近代中国の革命と秘密結社　中国革命の社会史的研究（1895-1955)』(汲古書院、2007 年)、鄭浩瀾『中国農村社会と革命　井岡山の村落の歴史的変遷』(慶應義塾大学出版会、2009 年)、小林一美『中共革命根拠地ドキュメント』(御茶の水書房、2013 年）などがあり、土客籍問題などに部分的に言及しているものの、「客家と革命」を研究の主題として掘り下げていない。

欧米では米国の研究者、エルボー（Mary S. Erbaugh）が論文 “The Secret History of the Hakkas: The Chinese Revolution as a Hakka Enterprise”（1992 年）の中で同様の疑問を提起し、中国政治の世界で客家の存在が見えにくい状況を「客家パラドックス」と呼んだが、革命根拠地時代にまで遡って問題の原因を探る研究は行っていない。井岡山闘争と客家の問題に関しては、米国の江西ソビエト史専門家、アベリル（Stephen C. Averill）の大著 “Revolution in the Highlands : China's Jinggangshan Base Area”（2006 年）があり、土客籍矛盾と袁王事件について詳細な分析を行っているものの、毛沢東の関与の有無や共産党の政治文化との関連性については検証していない。

本書は、問題の源流が毛沢東の井岡山闘争――具体的には共産党が井岡山の土客籍矛盾の克服に失敗し、同盟者だった客家土匪の袁文才・王佐を 1930 年に粛清した事件（袁王事件）――に見出せるとの仮説に立ち、共産党が土客籍の「『民族』闘争」(毛沢東）に直面し、エスニック問題を思想・政治的に「封印」するに至ったことを究明した点に独創性がある。本書は新たな視点からの井岡山闘争史、客家政治社会史でもある。井岡山闘争の見直しをはじめ、革命史研究、客家研究に一石を投じたと考える。

(4) 今後の展望

中国共産党は「中華民族」概念に基づき、漢族内部の多様性よりも一体性を強化する政策を推進しており、その理念は少数民族政策にも投影されている。こうした中で、政治的意味において族群や民族の区別や独自性を強調することはタブー視されている。しかし、本研究で明らかにしたように、本来、中国の革命や政治はエスニック問題と不可分の関係にあり、そこに潜んでいる特性は一体性というよりも多様性である。今後の研究課題として取り組みたいのは、中国共産党の派閥政治にエスニック要因がどのような影響を及ぼしてきたのかという問題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 藤野彰
２．発表標題 中国共産党と客家タブー：原点としての井岡山闘争
３．学会等名 慶應義塾大学東アジアサロン（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 藤野彰
２．発表標題 中国革命の中の客家――屈折するエスニック集団
３．学会等名 北海道大学東アジアメディア研究センター主催シンポジウム
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤野彰
２．発表標題 中国革命のコミュニケーション――中央ソビエト区と客家の言語・文化
３．学会等名 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院最終講義
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 藤野 彰	４．発行年 2022年
２．出版社 日本評論社	５．総ページ数 518
３．書名 客家と毛沢東革命　井岡山闘争に見る「民族」問題の政治学	

１．著者名 藤野彰（編著）	４．発行年 2018年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 444
３．書名 現代中国を知るための52章【第6版】	

１．著者名 藤野彰（編著）	４．発行年 2024年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 350
３．書名 現代中国を知るための54章【第7版】	

〔産業財産権〕

〔その他〕

(1) 『客家と毛沢東革命――井岡山闘争に見る「民族」問題の政治学』に関する新聞書評（『読売新聞』2022年4月3日付読書欄、評者＝国分良成・前防衛大学校長）
(2) 『客家と毛沢東革命――井岡山闘争に見る「民族」問題の政治学』の「今年の３冊」選出（『読売新聞』2022年12月25日付読書欄、評者＝国分良成・前防衛大学校長）
(3) 書評執筆（李昊『派閥の中国政治――毛沢東から習近平まで』名古屋大学出版会、2023年）（『公明新聞』2023年12月4日付読書欄、評者＝藤野彰）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関